

〔この一言〕

越えていけ そこを！…………… 井本孝男 …… 2

〔提言〕

「ことばの力」と「ナゴヤ学びのコンパス」を考える …… 加賀幸一 …… 4

〈特集〉自由進度学習に取り組む国語教室

〔実践者報告〕

単元内自由進度学習と振り返りによる自己調整力の育成 …… 佐藤和輝 …… 6  
～「取材して知らせよう」の学習を通して～（小3）

知りたい！考えたい！自ら「問い」を解決する国語の学習 …… 澤野佑輔 …… 12  
（小2）

〔名古屋国語教育研究会 オンライン講演会より〕

国語科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 …… 奈須正裕 …… 18

〔実践を語る〕

1 話すこと・聞くこと部会

学びを自己決定し、話すことのできる力を高めることができる …… 額 額 祐 輝 …… 20  
児童の育成（小4）

2 書くこと部会

伝えたいことを明確にして、自分の思いが伝わる文章を書くことができる児童の育成 …… 都 築 潤 矢 …… 24  
—思考ツールを活用した「思考を整理する活動」を通して—（小6）

3 小学校読むこと部会

「くらしと絵文字」絵文字の特長を捉えて、自分が見付けた絵文字を紹介しよう …… 西 脇 陽 介 …… 30  
—学びの意欲を喚起し、自走する学びを目指して—（小3）

4 中学校読むこと部会

自ら課題をもって作品を読み解き、成果を共有することを通して、 …… 水 迫 宏 明 …… 36  
作品をより深く理解することができる生徒の育成（中1） 田 部 翔 理

5 言語・書写部会

自ら言葉を磨こうとする生徒の育成…………… 梶 野 和 希 …… 42  
（中1・2） 倉 地 恵 一 郎

〔全国大会見てある記〕…………… 上 田 真・西 脇 治 郎 …… 46

〔この一冊〕…………… 佐 伯 美穂子・館 純 子 …… 48

〔教室Q & A〕…………… 50

〔編集後記〕…………… 53

名古屋国語教育研究会のあゆみ…………… 58

（題字 河合良昌）

## 越えていけ そこを！

井本孝男

(名古屋市立上社小学校)

令和五年九月、名古屋市教育委員会から、「ナゴヤ学びのコンパス」が示されました。そこでは、「全ての子どもは生まれながらにして有能な学び手である」という子ども観に基づき、「子どもが自分の興味・関心、能力や特性に合わせて学習方法や学習内容を個別に最適化する『子ども中心の学び』」の実現に向け、「教師は子どもとの学びに伴走すること」が求められています。

また、名古屋国語教育研究会では、本年度研究において、研究主題を「未来を創ることばの力」へと改め、「教師がサポーターに回り、子どもたちが自走する学びへの転換の視点に立った実践研究の必要性」を提案しています。

このような大きな転換点を前に、不安な感情ばかりが先行してしまう方もいるのではないのでしょうか。

そんな時、新しい一歩を踏み出す勇氣を与えてくれるのが表題の言葉「越えていけ、そこを！」です。

この言葉は、一九七四年に発表された「人生を語らず」(作詞・作曲 吉田拓郎)の一節からとりました。

私が初めてこの曲を耳にした中学生の時から現在に至るまで、人生の様々な場面で、私はこの「越えていけ、そこを」という言葉に励まされ、背中を押されてきました。今回は、その曲の一部分を引用して紹介します。

人生を語らず

吉田拓郎

朝日が昇るから

起きるんじゃなくて

目覚める時だから旅をする

教えられるものに別れを告げて

届かないものを身近に感じて

越えて行けそこを

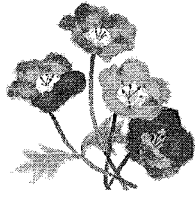
越えて行けそれを

今はまだ 人生を 人生を語らず

∴ (中略) ∴

今はまだまだ 人生を語らず

目の前にも まだ道はなし



越えるものはすべて手さぐりの中で  
見知らぬ旅人に夢よ多かれ  
越えて行けそこを  
越えて行けそれを  
今はまだ人生を 人生を語らず

この曲には、元気のよい前向きな言葉が数多く散りばめられています。現在の状況で「目の前にも まだ道はなし」と唄われても、やはり不安な気持ち募ってしまうかもしれません。

しかし、安心してください。名古屋国語教育研究会においては、子どもたち一人一人の個性を大切に、子どもたちの主体的な学習を生み出すことをねらいとした実践研究がこれまでも数多く進められてきました。

例えば、平成一二年教育研究員の松山清美先生（中小田井小 当時）の研究内容は「『表現モデル』を活用し、個々のペースに合わせ、児童の思考や意欲を中断することなく学習を進める」というものでした。

また、平成七年度の論文学習会で発表された上田真先生（大手小 当時）の実践は「児童一人一人の学習実態や課題を事前に把握し、児童全員分の個別の支援計画を立てた上で授業に臨む」というものでした。

これらの実践研究は、平成初期のものですが、まさに今求められている「自由進度学習」や「個別最適な学び」を先取りした取り組みとなっています。

皆様におかれましては、名古屋国語教育研究会で培われてきた実践研究をコンパスとして、自信をもって新しい一歩を踏み出してほしいと思います。

とは言え、教師の立ち位置を変え、「学びのコントローラー」を子どもに託してみる」ということは、やはり勇気のいることですし、手探りの中での試行錯誤の取り組みも続くと思います。

国語教育の未来を創っていく皆様へ行く先に「夢よ多かれ」という思いを込めて「越えていけ そこを！」のメッセージを贈ります。